



國家圖書館 編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

25



六月四日

六月三日

國家圖書館出版社



國家圖書館
編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

25

國家圖書館出版社

第二五冊目錄

昭和四年（一九二九）旅行日誌（第二十六期生）

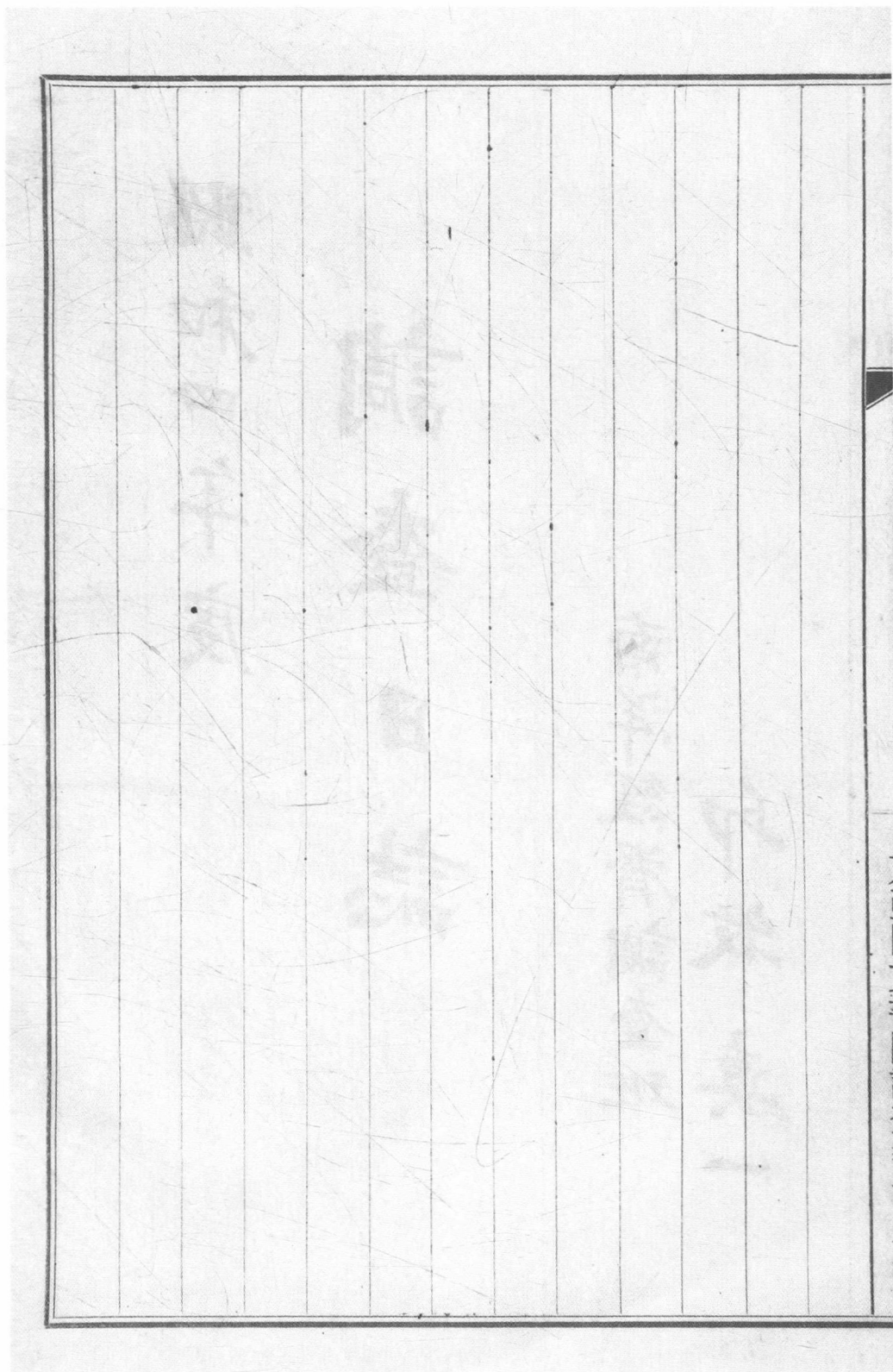
印牧真一	第七十五卷		一
梶原英三	第七十六卷		一四一
尾崎莊太郎	第七十七卷		二六九
岡野八太郎	第七十八卷		三九七
神河章三郎	第七十九卷		四六五

昭和四年度

調查日誌

南洋經濟調查班

印牧真一



第五卷 調査旅行日誌

五月二十九日 (水) 晴

大阪商船盛京丸は積荷の都合で予定より約一時間遅れて
出帆する。南支港勢調査班の全船で我々二人は無聊に
思せしむ。早調な船中も過し得るより舟人を誤る。
夕頃より天気は幾分傾き乍ら波穏かに舟山列島が其の
に英綴せられ景色は可なり。

五月三十日 木、晴

航海は至極平穩である。上甲板に出て紅雲撮影したり
或いは雑談に一同の元氣は軒昂である。

昼より上甲板にて湿気を含んだ風に当り過ぎたるか、夕刻より
咳しきり出て熱い幾分出て来たので焼酒を二三杯引つけ
て酔する。

南支那勢班の杉原君は発熱三十九度に至り幾分苦痛を訴ふる状態なり。

五月三十一日 金 晴

早朝船は函江口に進入る。潮航あるより約二時を余りて外港馬尾に投錨、兩岸は翠巒に圍繞せられ景色は頗る雄大なりて故國を思ふ。

杉原君は張して兩班由名は九時半ラエタムて福州に向ふ。十時頃福州着。直ちに領事館を訪ね領事田代氏に面會。令領事はワシントン大學出身の方にして最近同地に赴任せられ居るなり。(ラエダより連山翠嶺を遙かに眺めつゝお話を拝聴する。人口約四十万あり南支那東に亘る都會なりて土産物としては茶、紙、木材、外先るべしルヲなけり。省城の所在地なりて海軍總司令部等此地にありて政治上の要地である。

古来福州の男子は柔弱なりて男子は廣東人の如く政治的なる
外面上活躍せしむるを主に反し、女子は一見して明なる如く或は
水上に或は陸上の男子を凌いで労働上に活躍せしむる。

在留邦人は三百人見当りて、主として英國人が各方面に実権を
握つて居る様で邦人の勢力微々たるものと如し。

總領事館区域は一帶の高台なりて南台と称せられ、樹木繁茂
し一種の雅致ある所なり。附近に倭寇台ありて、往年倭寇
の慄慄なりしを想像するに難からず。

尚此地には鼓山あり、往年弘法大師の修道せし古刹あり、又
沃庵和尚は此の地、花田舎の出身なりて彼国と一変上密
切なる関係を有す。

福建省は広東省より更に華僑海外発展の根源地と云ふべし
福州よりむしろ厦門が大部分を占めて居る。

田部書記並の談に依は 福州の設港する所として往來の所

main River concurrently 大組織ありて各國領事團にて

行い来りしが、突發の舉りたる故、福建省政府此の事案の引渡を希望せらるゝ。好機として責任を轉嫁するの得策なるを知り、某公使團に稟請せる結果許可を得て引渡せるなり。

現在の馬尾福州間の水深状態は大俵昨年九五〇呎、永興號

が航行せるを以て空前絶后にして現在には五五〇呎見當。汽船

の航行可能なるもの、如し。尚馬尾下流は恒潮時二十呎、水深を

有するが故に大俵に於て五呎噸級の大洋汽船、往來自由なり。

ラニタ、都合により大和館に一部するを以て、一時過半全館に

落着き、屋敷石城内方面を見学する。

先づ福州電気公司を參觀する、主理人林希實氏は、廠前高工

の出身にして巧な日本語にて色々説明して下さる。次いで五老山

三百万円を有し、現在二四五万馬力に動力を配当五分、成績を
挙げてゐる。

それより蛇車を飛ばして、城外を隈なく巡りて市区改正、新行振
りを見て、吃驚させられる。

夕頃六時大佛の兄学を終へて馬路の中国旅館で友田、清水
両先輩と夕餉を共食し旅行調査に干するは注意や、支那航
空を促して早速説き、拝聴するところが出来た。

福州一泊。

六月一日土曜。

午前七時、三十分で本船に上る。先輩両氏は早船に上るが、
送別を送つて下さる。

事務長の厚意により同一等船室に入水して頂くとゐる。
十三時馬屋より出帆。此の時分より風勢強くなる。

六月二日、日、晴

九時半基隆港外着、横渡船の来るを待つ。暫く、土中

港内中程に投錨する。五時半に西へ上陸。

南船会社 オフィスに至り、此處迄の乗船切符を、代り置かん。

思へば、金母に入国税百盾の外は、要するところにて、必要なる

金額を、銀宛のドラフトにて持つ。居る外は、正金信用状にて持つ

ところにて、大分予算が、還つて、面喰ふ。

兎に、調査材料を得るに便なるよりして、台地に着くが

得策である。土中三十分、基隆港に、西へ、台地に向ふ。

目撃して、官衙を、公衆の訪問ル出来ぬ。本町一九旅館に

宿を取り、各方面へ通信。

六月三日、日、晴

九時半頃より、台銀に赴き、ドルドラフトを、基隆台銀宛にあるの

て、平るゝ取るゝ移しへ。

総督府官房調査課に先輩小林馬氏を訪ね、調査資料を貰ふべく期待してゐたが、大したところなく、幸ひに全課に最近南洋を視察して歸る方から居るのを直接にお話を持ち参考となる所ありたり。

会所へ歸りて先輩岡田氏を尋ね、色々は過去を追憶談を拝聴する。尚スライム、ホイルルといふ馳名なりつゝ、豊信田を園歴談を伺へば又其の面目を存せ、躍如なるを覚ゆ。

専売局を訪ねるに先輩の方より来る、空を撲つて直ぐに引かへし帰途台地病院に杉原君と兄舞一は、相愛する親友く来る病名判定せず、フースー肺炎を疑あるところなり。

午後八時頃牧野水沼両君旅館へ来訪、十時四十分、列車にて之を出発を見送る。

六月四日、火曜

本日出張。予定ナリ。ハタチヤ九は一泊延いて台北滞在。一日、余裕ヲ持ツ。

岡田氏ヲ訪ねて入国税の方、金子ヲ立替へて頂くことにする。専売局の方へ予め、岡田氏より電話して頂く。おいて訪問。先年、高須、御野、宜保三氏は直ちに陳列室に樟脳工場の方へ案内して下さる。終つて昼食を以て馳走になりつゝ、色々話して承る。

帰途、杉原君と見舞いて、直ちに高品陳列所及び植物園を見学する。

夕食后龍口町、松田分三先生のお宅を訪問し、懐旧談に花が咲いて十廿迄くまでお邪魔をする。

先年、至極元気な又八月、初め香港にお目にかゝることに決たまふ。

六月五日、水、晴

午前七時三十分台北発して基隆に向ふ。高船会社にて切符を
求め、ラエター待て、バタビヤ丸は港内に投錨してゐると思ふ
より小きく心細い。九時半乗船。
十時出帆である。比律賓の海峡を遡り、遂に全船にて帰途に
就くといふ見送る人多く時をぬぐふ。船は台湾の東を通るゝ外へ
三三に寄港する時には船は台湾の東を通るゝ外へ進路を取ら
ない居たが、或程船は基隆港を出るゝ外へ進路を取ら
ないやから南へ進むのであらう。

波濤は相當に荒い。

六月六日、木、晴

船は遅々として蒼海の中を走つて居る。西側には台湾の
高し海岸線が見えせめてゐる。

デフキに出、輪投げかん興する。

土母事、過する頃、よく帝國の極南に輝く鴛鴦島、燈台を通過する。台端より青水と波は一より高く、デフキに打上げて来る。

六月七日、金、晴。

比律賓の北泳選手、ル、駒張んなつて船中は比較的、退屈知らずである。

六月八日、土、晴。

台端より出、よりセ三強より走つて、五時過ぎ、ミラノ港に横付けになる。いんちん、ミラノ港の水をこらう。直ちに上陸して、青水を一舟に少し、兄等、いんちん、税関監督の厳重なる思ふ、林にならな。といふ、ハスポート、引合せて、一と上陸許可証を出さう、いんちん、あるて平る、取らう、静一く。

それと最初の間はスムーズに進んだけれども、到頭台湾本島人は
今は日本人から知れなかつた、其の昔は支那人であるといふ判うなとい
ふといふ出して、基隆から乗るものは後進して去るものになつて、
それと側杖を食つた筈である。

然し彼等は上海米穀商の船の査証を受け居るのだ、話にはあ
らうといふるなし上陸を許さるる。

夕間迫るころ、先づインテロモロスと通り抜けて旧西班牙
時代々面影を思い、エスコラ、アベリサルと近代の商業中
心区を見学する。

それより電車にて効外を一巡し、シヤワー後の涼味を満喫
して船に歸へて、エミラと一夜を明かしたてである。

六月九日、日、晴。

六時前といふころ、船を出て馳走のん、先づエミラホテルの前より